

台湾と香港：アイデンティティと民主化の論理

津田塾大学 中村元哉

台湾における「ひまわり運動」（2014年春）や香港における「雨傘運動」（2014年秋～冬）が物語っていたことは、大陸中国と台湾と香港が共存と対立の複雑な様相を帯び、その三者のトライアングル関係が台湾や香港のアイデンティティ論や民主化論とも交錯していた、ということであった。別の観方をすれば、我われ中国研究者は、大陸中国を論じるにあたり、香港と台湾を射程に収めなければならない、ということでもある。とりわけ、「一国二制度」の現状を分析し、その将来を見通そうとするのであれば、なおさらそうであろう。

しかし、大陸中国と台湾と香港の複雑な関係性は、今日になって突如として始まったわけではない。たとえば、雨傘運動での香港における民主化論とその裏側にあるアイデンティティ論の高揚は、台湾の民主化や台湾アイデンティティの現状とも不可分な関係にあり、そうした台湾の動向は、どんなに少なく見積もっても、1970年代にまでさかのぼることができる。そして、このような台湾の動向は、1949年から続く中台分断の政治情勢とも不可分な関係にあり、この中台分断下の香港情勢も、大陸中国や台湾における中華アイデンティティ論や民主化論とも連動していた。

要するに、現在の大陸中国と台湾と香港の関係性を紐解くためには、台湾や香港の現状分析が必要なことは言うに及ばず、三者の関係性の背後に潜む歴史的水脈を分析することも必要なわけである。そこで、本分科会は、大陸中国と台湾と香港の関係性および台湾と香港の動向をひとまず「アイデンティティと民主化の論理」という視角に限定し、その歴史性と現状の分析に重点をおく。

中村元哉（津田塾大学）「戦後香港の政治思想と兩岸関係——『聯合評論』と『盤古』を中心に（仮）」は、冷戦下の香港がどのような政治思想を形成し、その過程で民国や人民共和国をどのように評価しながら自己認識を深めようとしたのかを、『聯合評論』（1958-1964）と『盤古』（1967-1978）を中心に分析する。家永真幸（東京医科歯科大学）「台湾の民主化過程における雑誌メディアの役割（仮）」は、冷戦下の台湾がどのように民主化を準備したのかを「党外メディア」の役割に注目しながら分析する。倉田徹（立教大学）「『雨傘運動』後の香港——独立論・民族論の論理と展望（仮）」は、香港の若い世代が雨傘運動後に主張し始めた「香港民族論」や最新の立法会議員選挙の結果をもとに、香港の政治思潮について論じる。

なお、本分科会の司会は谷垣真理子（東京大学）が、コメンテーターは趙宏偉（法政大学）がそれぞれ務める。